茨城県行方郡麻生町

城口遺跡

調査報告書

平成13年5月

麻生町教育委員会

城口遺跡調査会

序　　文

麻生町は霞ヶ浦と北浦の大きな湖に面し、水と緑に満ち溢れた豊かな自然に恵まれていることから、古代より人々が生活するうえで恵まれた環境にあったと思われ、幾多の歴史が刻まれた埋蔵文化財をはじめとする貴重な文化財が数多く残されています。

町では、これらの埋蔵文化財を保護し、後世に継承することの重要性を踏まえ、その対応に努力しているところです。

麻生町於下の土砂採取場計画地内には、埋蔵文化財が所在しておりました。

文化財保護の立場から協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査をして記録保存することとなりました。

調査にあたり、県教育庁文化課の指導のもと常総考古学研究所・藤原均氏を調査主任として、地元の方々の協力を得て調査を完了することが出来ました。

ここに改めましてご指導、ご協力を賜りました関係者の方々に深く感謝申し上げます。

また、調査経費を負担してくださいました㈱くりはら・栗原善一氏に対しまして、深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

最後に、本報告書が幅広く活用され、貴重な文化資料となることを期待したいと思います。

麻生町教育委員会教育長
城口遺跡調査会長
橋本豊榮

例　　言

1、本報告書は、茨城県行方郡麻生町於下字城口537に所在する城口遺跡の調査報告書である。

1、城口遺跡は、土採取工事に先行して実施した現地踏査で新発見された遺跡で、各1基の塚と古墳（計2基）及び土師器の散布が認められた遺跡である。（遺跡No 299）

1、当遺跡の調査は、確認調査と本調査とに分けて実施した。確認調査は、平成12年12月に麻生町教育委員会の指導・協力で実施し、住居跡と溝を確認した。本調査は、平成13年1月より開始した。

1、当遺跡の本調査は、麻生町教育委員会の指導で調査会を組織して実施し、藤原が担当した。調査会の組織は、別項に記す。また古墳1基は、現状保存することとなった。

1、本報告書は、当初B版で印刷する予定であったが、A版に変更したため挿図の統一は出来ずスケールで縮尺を示した。

1、当遺跡に関係する遺物・図面・写真等は、麻生町教育委員会が一括して保管している。

1、当遺跡の調査に際し、下記の方々の指導・協力があったので誌上であるが、記して謝意を表する。

茨城県教育庁文化課、（財）茨城県教育財団、鹿行教育事務所、麻生町教育委員会、
麻生町町史纂室、麻生町シルーバー人材センター、㈱くりはら、㈲高野電子工業
麻生町・玉造町・佐倉市の作業員の方々

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
調 査 会 組 織

Ⅰ、調査に至る経緯
Ⅱ、調査の経緯
Ⅲ、遺跡の位置と環境
Ⅳ、調査結果の概要
Ⅴ、遺構と遺物
Ⅵ、まとめ
Ⅶ、報告書抄録

調 査 会 組 織

城 口 遺 跡 調 査 会

会　長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副会長	辺田　弘	麻生町文化財保護審議会会長
理　事	茂木岩夫	同審議会委員
	高野悦男	同
	植田敏雄	同審議会専門調査員
	平輪一郎	同
	藤原　均	調査主任
	栗原善一	株式会社くりはら
	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課長
監　事	貝塚庄一	株式会社くりはら
	小室　旭	麻生町出納室長
幹　事	鴇田和夫	麻生町教育委員会社会教育係長
	高田和明	麻生町教育委員会主事

城 口 遺 跡 調 査 団

調査団長	橋本豊榮	麻生町教育委員会教育長
副 団 長	高木俊博	麻生町教育委員会生涯学習課長
調査主任	藤原　均	日本考古学協会会員 常総考古学研究所
作 業 員	地元協力者	
事 務 局	鴇田和夫	麻生町教育委員会社会教育係長
	高田和明	同教育委員会主事

Ⅰ　調査に至る経緯

平成12年11月29日に、株式会社くりはらより麻生町於下で土採取事業計画のために、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が教育委員会に提出された。これにより教育委員会は常総考古学研究所の協力を得て12月1日に現地確認・踏査を実施し、塚と古墳各1基と土師器片の散布を確認したために、くりはらに確認調査が必要であることを回答した。これにより教育委員会は、くりはらと確認調査の実施について協議し12月14・15日に実施することとした。確認調査は、くりはらと常総考古学研究所の協力を得て実施し、住居跡と溝を発見した。これにより教育委員会は、計画用地内に塚・古墳・住居跡・溝が所在するために発掘調査が必要であると回答した。

この後教育委員会は、株式会社くりはらと遺跡の現状保存に関し協議したが、現状保存は不可能との結論に至り記録保存することとなった。また計画用地内に所在する古墳1基は、現状保存とし開発計画より除外することとした。

この結果から発掘調査を実施することとし、調査会を組織して平成13年1月30日より開始し、調査を常総考古学研究所藤原　均氏に依頼した。

Ⅱ　調査の経緯

城口遺跡の調査は、平成13年1月30日より開始した。当日は、諸器材の搬入・立木の伐採と整理及び塚の地形測量を実施した。また塚の北側から表土除去作業を開始し、当日終了した。この後塚の調査から開始し、2月5日に終了した。塚の調査終了後に、住居跡と溝の調査に移行し溝より開始した。溝は合計3条で、中央部より住居跡が1軒発見された。この住居跡と溝の調査は2月8日に終了した。この後塚の北側で発見されていた住居跡の調査を行い、2月13日に現地調査を終了した。

現地調査終了後に整理・報告書執筆・編集作業を、平成13年2・3月に行い作業を終了した。

Ⅲ 遺跡の位置と環境

城口遺跡は、茨城県行方郡麻生町於下字城口537－1に所在し、土採取工事に伴う確認調査で新発見された遺跡である。当遺跡が所在する麻生町は、茨城県の南東部で北西～南東に細長く伸びる行方台地の東側に位置している。行方台地は、台地の北側に所在する北浦と南側の霞ゲ浦とに挟まれておりこれに流入する河川により台地の内陸部まで開折されており、樹枝状の複雑な舌状台地を形成している。このような舌状台地は、台地の内陸部は比較的広い台地となっているが、台地の先端部は馬背状に細長い台地となっており、当遺跡もこのような台地の先端部で樹枝状に突出した台地上に所在している。

城口遺跡は、麻生町の北西部で霞ゲ浦水系の谷津（於下谷津と荒井谷津）に挟まれ、南方に細長く伸びる標高26m代の台地から西方に小さく派出した標高25m代の台地上に所在している。当遺跡を挟む谷津は、比較的狭いが深い谷津である。

麻生町の遺跡は、平成11年度に実施した分布調査で当遺跡を除き298遺跡が周知されていたが、当第

第１図　　遺跡位置図

遺　跡　名　称

1）　城口遺跡
2）　桟舗山遺跡
3）　岡平遺跡
4）　国神遺跡
5）　古屋遺跡
6）　茶臼山古墳群
7）　歌ヶ崎古墳
8）　神山古墳
9）　神宿遺跡
10）　内宿遺跡
11）　高野遺跡
12）　五霊谷貝塚
13）　於下貝塚
14）　羽黒平遺跡
15）　原北遺跡
16）　原東遺跡
17）　屋敷貝塚
18）　西ノサキ西遺跡
19）　ヤシキ添遺跡
20）　代田貝塚
21）　代田館跡
22）　尾張塚

遺跡が299遺跡目となる。これらの遺跡は、北浦と霞ゲ浦に面した舌状台地の先端部に多く所在しているが、台地の内陸部にかけて減少する傾向を有している。

当遺跡が所在する台地上には桟舗山遺跡（2、奈良・平安）、岡平遺跡（3、縄文・奈良・平安）、国神遺跡（4、縄文・古墳～平安）、古屋城跡（5、中世）が所在しており、荒井谷津を挟み北側の台地上には茶臼山古墳群（6、古墳）、歌ゲ崎古墳（7、古墳）、神山古墳（8、古墳）、神宿遺跡（9、縄文・奈良平安）、内宿遺跡（10、縄文）が所在している。於下谷津を挟み南側の台地上には高野遺跡（11、古墳）五霊谷貝塚（12、縄文）が所在している。東側の台地上には於下貝塚（13縄文）、羽黒平遺跡（14、縄文）原北遺跡（15、縄文、古墳～平安）、原東遺跡（16、縄文・古墳）屋舗貝塚（17、縄文）、西ノサキ西遺跡（18、縄文）、ヤシキ添遺跡（19、縄文）、代田貝塚（20、縄文）、代田館（21、中世）などの遺跡が所在しており、当遺跡の北方には尾張塚（22、近世）が所在している。特に大川水系で、中流域に面した台地上に貝塚を中心とした縄文時代や、古墳～平安時代にかけての遺跡が多数所在している。

当遺跡が所在する「城口」とは「上口」とも呼び、遺跡北東部の台地上には「古屋城」を通り北東の「中城跡」に通じる旧道が、山道として現存している。これが中世からの道とすれば、「城口」という地名は「城への入り口」＝「城口」となり中世からの地名と判断される。

なお当遺跡の確認調査の時点には、塚周辺の伐採と搬出により地形が著しく破壊していたことを付記する。

Ⅳ　調査結果の概要

当遺跡の調査結果は、第3図に示したように塚1基・溝3状・住居跡2軒が発見調査された。塚は現地踏査時に所在しており、溝と住居跡が確認調査で発見された遺構である。

塚は南東方向に突出する台地に沿って盛土されており、溝は台地を分断するように掘り込まれており、住居跡を掘り切っている。第1号溝（ＳＤ－１）は、塚を取り囲むように掘り込まれているが第2・3号溝（ＳＤ－２・３）は、新旧を有しながら台地を東西に分断するように掘り込まれている。２軒の住居跡は砂層内に掘り込まれているが、第1号住居跡（ＳＩ－１）は軟質な明褐色砂層内に掘り込まれており、第２号住居跡（ＳＩ－２）は硬質な茶褐色砂層内に掘り込まれている。この第２号住居跡（ＳＩ－２）は、長方形状を呈する住居跡である。

出土遺物としては、土師器甕・壷・椀・高台付坏・須恵器高台付坏・馬具・縄文式土器・弥生式土器が出土している。塚の封土内からは、土師器甕体部片（古墳時代）が2点出土したのみであり、溝内からは土師器甕・壷・椀・馬具・縄文式土器・弥生式土器が出土している。住居跡内からは、須恵器高台付坏・土師器高台付坏が出土している。

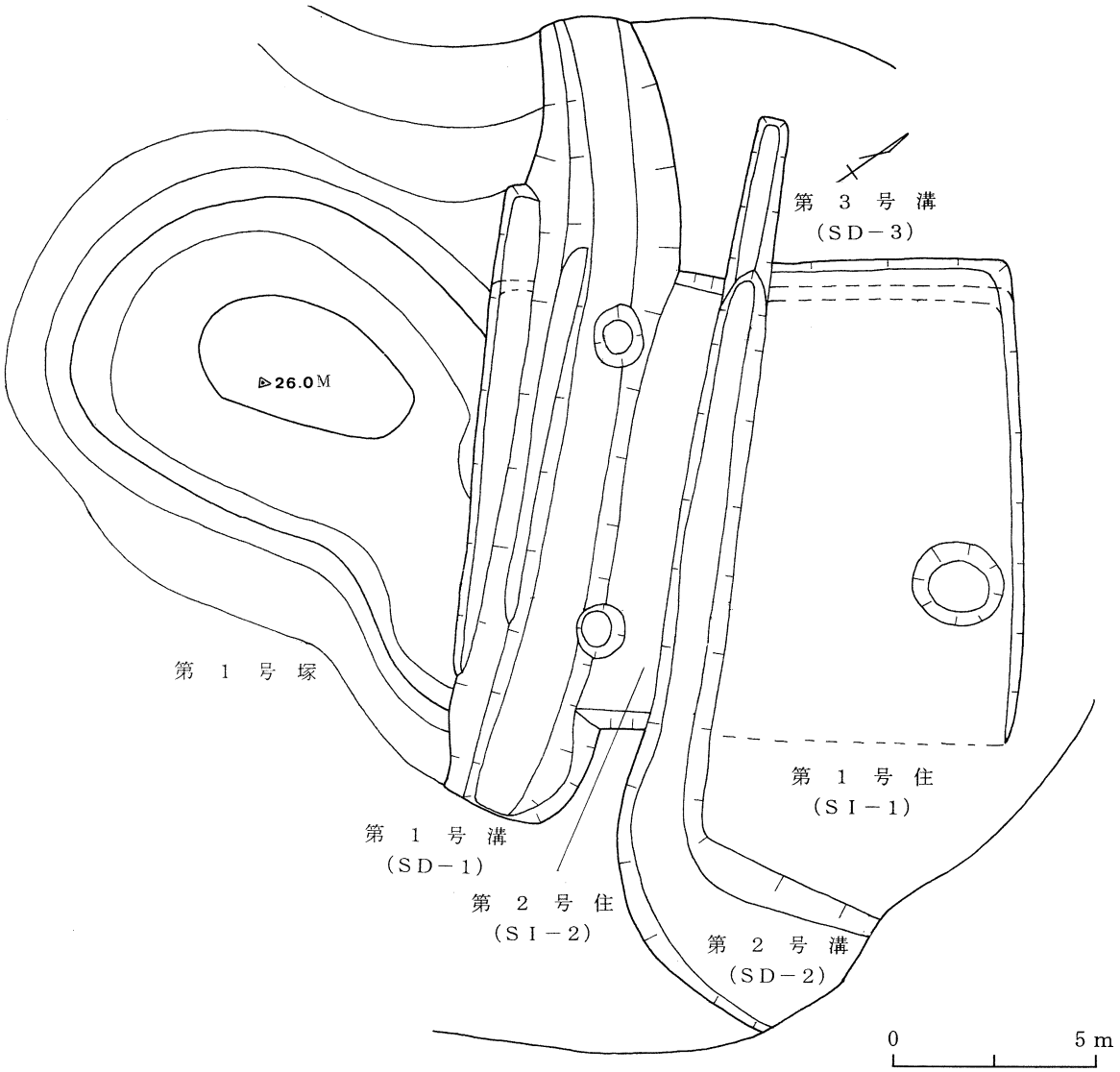
Ⅴ　遺構と遺物

１、塚（第１号塚、第４図、図版Ⅱ）

塚（第1号塚）は台地の南側先端部に所在し、東西径5.30ｍ・南北径4.00ｍ・高さ0.92ｍを計測し楕円形状で方位をＮ－56°－Ｅに有している。塚の頂部は中央西側で、標高26.0ｍを計測する。塚の

第2図　遺跡付近地形図（S ＝ 1 ; 2,000）

第３図　遺構全測図



の周辺は標高 25 m程の平坦部で、周溝と推定される痕跡は認められなかった。

塚の封土は、表土・明茶褐色土・黄褐色砂が盛土されているが、黄褐色砂層は軟質な自然層で明褐色土は盛土であるが、旧表土層は認められなかった。明茶褐色土は、黄色砂粒子を含み南側・西側ではやや硬質となっているが、全体的には軟質な土層である。

塚に伴う遺構は何ら認められず、出土遺物も明茶褐色土内より２点の土師器甕片が出土したのみで時期決定可能な遺物は出土しなかった。

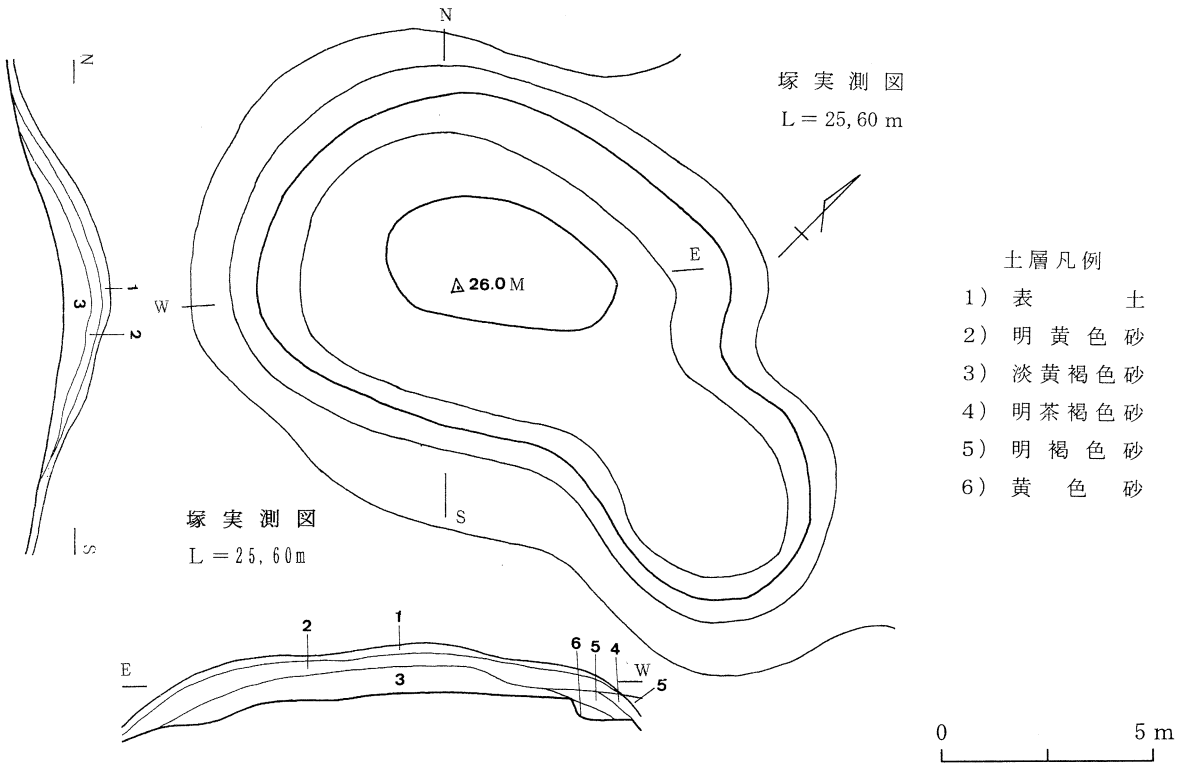
塚の封土は、北側で住居跡の覆土上に堆積していることから、住居跡より新しく中・近世代の塚と推定される。

２、住居跡（第５・６図、第１表、図版Ⅱ・Ⅲ）

第１号住居跡（ＳＩ－１）

第１号住居跡（ＳＩ－1）は、塚の北側で第２号溝（ＳＤ－2）に西側を掘り切られた状況で確認されており、第２号住居跡（ＳＩ－２）とも重複していたようである。確認面では、東西径 6.30 m・南

第４図　塚実測図



北径 5.35 m・深さ 0.20 mを計測し、N－50°－Eに方位を有し長方形状を呈する住居跡である。掘り込み面は、軟質な明褐色砂層面である。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められず柱穴は西側で２本認められたのみである。炉跡やカマドは、認められなかった。また東壁付近には、楕円形状（1.05 × 0.92 × 0.30 m）を呈する土坑が１基認められるが、木根による撹乱である。また床面は、軟質な砂層面で直床状である。

土層は黄褐色土・茶褐色土・黒色土・明褐色土等が堆積しているが、砂質で軟質な土層である。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕片が少量出土しており、床面及び床面付近からは土師器高台付坏が出土している。出土遺物で図示出来たのは、高台付坏（2）のみである。

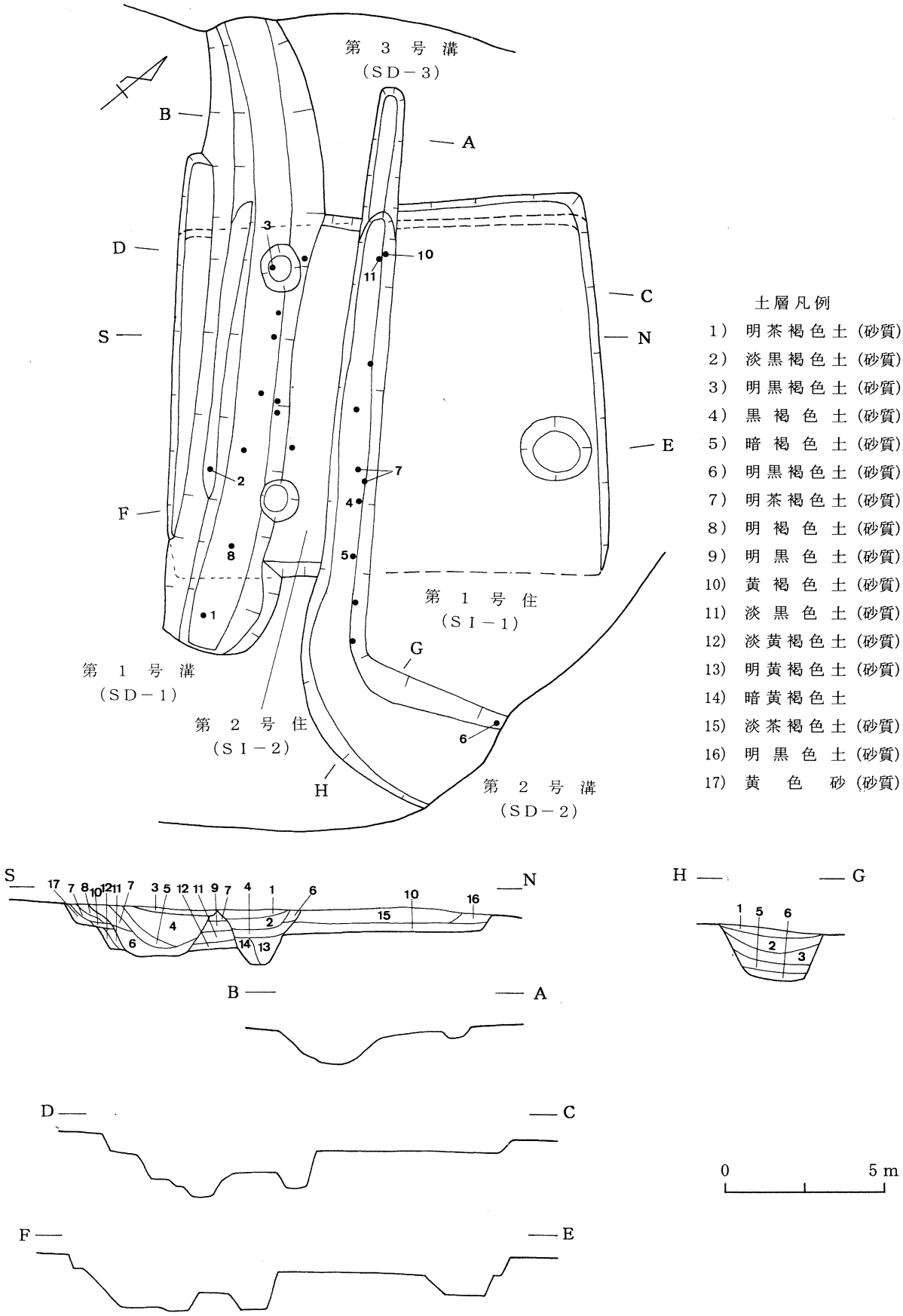
第２号住居跡（ＳＩ－２）

第２号住居跡（ＳＩ－２）は、第１号塚の北側で第１号溝（ＳＤ－１）に中央部を切られており、上面はＳＩ－１に切られている。確認面での規模は、東西径 3.00 m・南北径 5.20 m・深さ 0.50 mを計測しN－50°－Wに方位を有し長方形状を呈している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝・柱穴・カマド等は認められなかった。また北壁の一部は、撹乱をうけている。床面は硬質な茶褐色砂層面で、直床状を呈している。

土層は黒褐色土・黄褐色土が堆積しており、砂質で軟質な土層である。堆積状況は、自然堆積と判断される。

出土遺物としては、土師器甕片が少量出土した程度で図示可能な遺物は出土しなかった。遺構の状況から本跡は、定住としての「住」とは考えがたい。

第5図　住居跡・溝実測図　（L＝26,50 m）



3、溝（第5・6図、第1表、図版Ⅱ・Ⅲ）

第1号溝（ＳＤ－１）

第1号溝（ＳＤ－１）は、塚の北側で北西斜面よりＳＩ－１・２を掘り切って、塚の北東斜面部まで掘り込まれている。規模は、全長9.20 m・幅1.80 m・深さ0.70 mを計測する。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれているが南壁より北壁が急斜面となっている。底面には、柱穴等の痕跡は認められなかった。

土層は黒褐色土・暗褐色土・茶褐色土が堆積しており、砂質で軟質な土層である。堆積状況は、南側から堆積したことを示す自然堆積である。

出土遺物としては、底面付近より須恵器高台付坏、土師器高台付坏・壷・甕が出土しており、覆土内より弥生式土器片・縄文式土器片が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、須恵器高台付坏(1)、土師器高台付坏（2)・壷（3)、縄文式土器片（12・15)、弥生式土器片（11）の6点である。

第2号溝（ＳＤ－２）

第2号溝（ＳＤ－２）は、ＳＤ－１の北側でＳＩ－１・２を掘り切ってほぼ東西方向に掘り込まれている。北側端部はＳＩ－１の北壁中央部付近で、ここから直線的に南側に掘り込まれてから南東部斜面にかけて掘り込まれている。規模は、全長9.40 m・幅0.70～1.70 m・深さ0.66 mを計測するが、幅と深さは南東端部にかけ広くやや深くなっている。底面は平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。また溝の北側では、第3号溝（ＳＤ－３）に上面を一部掘り切られている。

土層は黒褐色土・暗黄褐色土・黄褐色土が堆積しており、砂質で軟質な土層である。堆積状況は自然堆積である。

出土遺物としては、土師器甕・椀・縄文式土器片・弥生式土器片が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕（4～8)・椀（9)・弥生式土器片（13・14）の8点である。

第3号溝（ＳＤ－３）

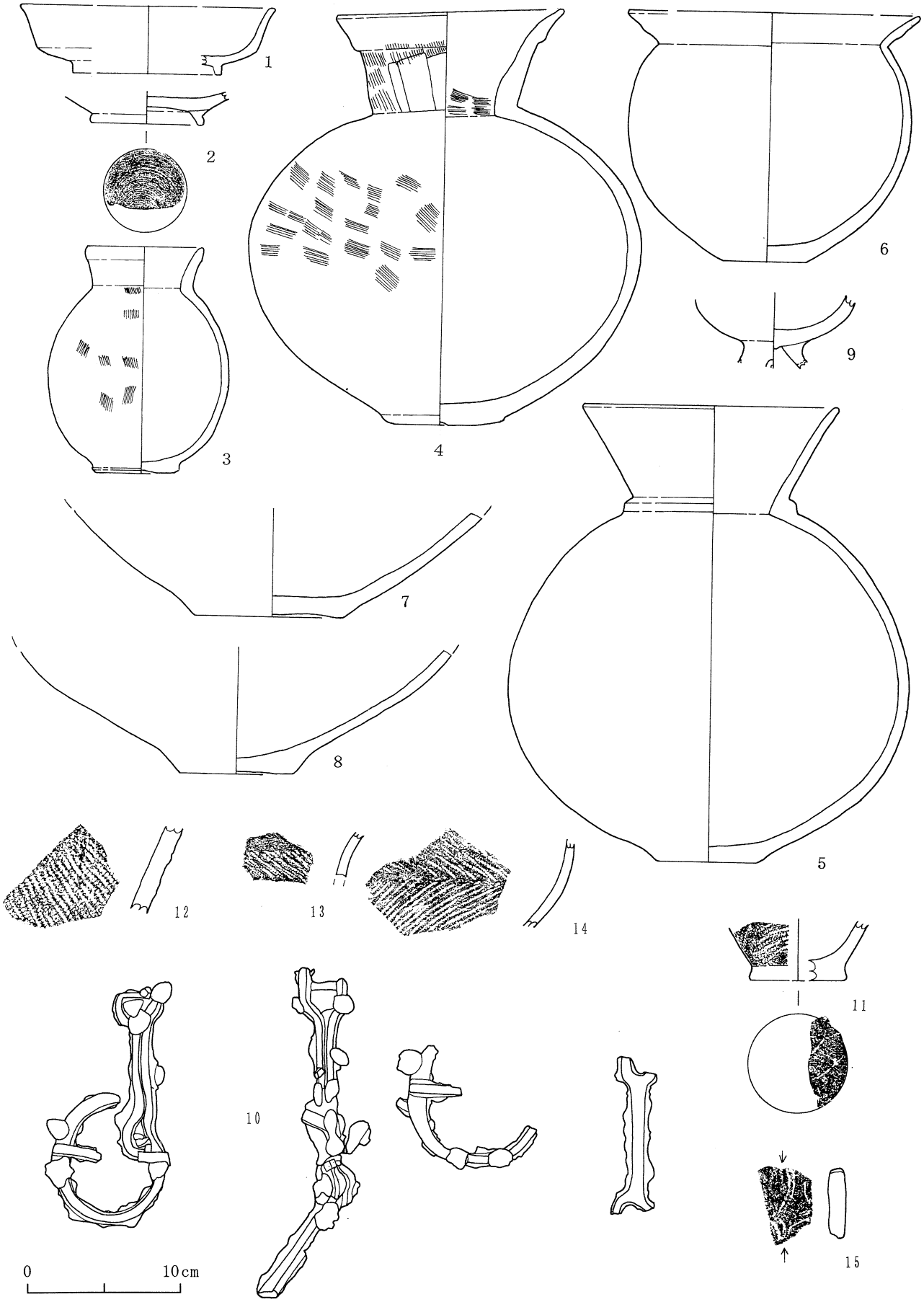
第3号溝（ＳＤ－３）は、ＳＤ－２の東側でＳＤ－２の上面を掘り切って東西方向に掘り込まれている。西側端部はＳＤ－２の西側であるが、東側はＳＩ－２東壁付近で消失している。確認面での規模は、全長8.00 m・幅0.48～1.00 m・深さ0.12～0.30 mを計測する。底面は皿状を呈し、壁は斜めに掘り込まれている。

土層は黒褐色土･茶褐色土が堆積しており、砂質でやや硬い土層である。出土遺物としては、馬具（轡）と少量の土師器片が出土した程度であり、図示出来たのは馬具（10）1点のみである。

Ⅵ 出 土 遺 物

城口遺跡よりの出土遺物としては、須恵器高台付坏・土師器高台付坏・高坏・椀・鉄製品（馬具)・縄文式土器・弥生式土器等が出土している。これらの出土遺物は、ＳＤ－１～３覆土内よりの出土が中心である。1はＳＤ－１より出土した須恵器高台付坏で、内外面ロクロ整形で高台部は直立ぎみに削り出されている。2はＳＩ－１より出土した土師器高台付坏片であり、体部下半以上を欠損している。高台部は外開きし、先端はヘラ削りヘラナデが施されている。3はＳＤ－１からの土師器壷であり、体部を一部欠損

第６図　出土遺物実測図



第１表　出土遺物一覧表

番号	種類名称	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	現高	脚径	胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴
1	須恵器 高台付坏	第１号溝（ＳＤ１）	推定 15.6	推定 9.1	4.6	推定 9.0	暗灰褐色・長石 石英含む・緻密	良好 硬質	暗灰 褐色	1/5 程度残存、高台部ヘラ削り出しで長方形状、坏部内外ロクロ整形
2	土師器 高台付坏	第１号住（ＳＩ１）			2.1	6.5	雲母・長石・石英を含む・粗い	良好 硬質	明茶 褐色	1/3 程度欠損、坏部内外ロクロ整形 底部回転糸切り、高台ヘラナデ
3	土師器 壺	第１号溝（ＳＤ１）	推定 7.3	5.4 × 5.2	13.6		長石・石英・雲母を含む・粗い	良好 硬質	明褐色	底部小さく突出し歪、口縁部横位ナデ、体部刷毛目整形後ヘラナデ、体部外面摩滅
4	土師器 甕	第２号溝（ＳＤ２）	13.8	7.4 × 6.9	24.8 × 25.6		小石・長石・石英を含む、粗い	良好 硬質	明茶 褐色	体部下半 1/3 程欠損、口縁部ナデ下半刷毛目整形後ヘラナデ、体部刷毛目整形後ヘラナデ、歪な器形
5	土師器 甕	第２号溝（ＳＤ２）	15.7	6.2	28.1			良好 硬質	淡明 褐色	口縁部 1/3 体部 1/4 程欠損、口縁ナデ体部ヘラ削りヘラナデ、体部に赤彩有り
6	土師器 甕	第２号溝（ＳＤ２）	推定 18.0	5.3	15.0		長石・石英の微粒子を含む、緻密	良好 硬質	明茶 褐色	口縁一部と体部 2/3 程残、口縁～底部ヘラナデ、外面著しく摩滅
7	土師器 甕	第２号溝（ＳＤ２）		8.8	6.2		雲母・長石・石英粒を含む、緻密	良好 硬質	明褐色	体部下半以上を欠損、体部と底部ヘラナデ 体部内面著しく摩滅
8	土師器 甕	第２号溝（ＳＤ２）		7.0	7.7		長石・石英粒子を少量含む、緻密	良好 硬質	明褐色	体部下半以上を欠損、体部ヘラ削り後ヘラナデ 内面ヘラナデ
9	土師器 高坏	第２号溝（ＳＤ２）			4.4	孔径 0.9	長石・石英・雲母を含む、粗い	良好 硬質	明褐色	坏部 1/4 脚部 1/3 程残、内外面ヘラナデ 孔は３孔と推定
10	馬具	第３号溝（ＳＤ３）	鏡板 6.9 × 7.9	はみ 19.0	立聞 10.3					十文字轡の鏡板・はみ・立聞の部分で引き手を欠損している。中世品
11	弥生式土器片 甕	第１号溝（ＳＤ１）		推定 6.0	3.6		長石・石英・雲母粒含む、粗い	良好 硬質	明茶 褐色	底部 1/3 程の破片、底面に木葉痕を有す 体部には付加状縄文を施文
12	縄文式土器片	第１号溝（ＳＤ１）					雲母・長石・石英を含む、緻密	良好 硬質	淡黒 褐色	
13	弥生式土器片	第２号溝（ＳＤ２）					長石・石英粒子を含む、粗い	良好 硬質	淡黒 褐色	体部上半の小破片、上半は無文帯 付加状縄文を施文する
14	弥生式土器片	第２号溝（ＳＤ２）					雲母・長石・石英粒を含む、粗い	良好 硬質	明茶 褐色	体部片で、付加状縄文を羽状施文
15	縄文式土器片 土器片錘	第１号溝（ＳＤ１）	長 4.4	幅 3.0			長石・石英粒子を含む、粗い	良好 硬質	暗褐色	土器片転用の錘である 縦位に一条の糸掛けがある

しており、器面はやや摩滅している。4はＳＤ－２よりの土師器甕であり、体部下半を1/3程欠損している。口縁部下端から底部にかけては、刷毛目整形後ヘラナデが施されており、やや歪な器形である。5はＳＤ－２よりの土師器甕で、口縁部～体部下半にかけて一部赤彩が残っているが、体部外面は著しく摩滅している。6はＳＤ－２よりの土師器甕であり、口縁部が一部残存するのみで、外面は著しく摩滅している。7・8はＳＤ－２よりの土師器甕で、体部下半以下の破片である。7は体部内面が摩滅している。9はＳＤ－２よりの土師器高坏片であり、半球状の体部で脚部には孔が1孔認められる。10はＳＤ－３より出土した馬具で、轡での一部である。馬具としては、十文字轡の一部であるが、馬骨は認められなかった。11はＳＤ－１より出土した弥生式土器の底部片で、体部には付加状縄文が施文されており、底部には木葉痕が認められる。12は縄文式土器片であり、13・14は弥生式土器片である。15は縄文式土器片を転用した土器片錘で、１状の糸掛けが認められる。

Ⅶ　まとめ

本遺跡の調査結果は、いままで報告してきたとうりである。2軒の住居跡は、新旧関係を有しているが、古墳時代以降の住居跡である。出土遺物からＳＩ－１は、古墳時代前期末頃に位置するようであり、ＳＩ－２は奈良時代の住居跡と判断される。しかし遺構の立地条件と遺構の状況から「定住」を意識した住居とは考えにくく、ある一時期使用した住居と推定される。

出土遺物の多くは、溝内からの出土で器外面が著しく摩滅している土器が主流で、一括廃棄のようである。ＳＤ－３は馬具から、15世紀頃広く使用された十文字轡であることから同期の溝と判断される。

塚とこれ沿うように掘り込まれたＳＤ－１は、塚とこれ以外の空間を区切る意味を有するようであり、中近世の塚と推定される。遺物が皆無のために、具体的な時期・用途は不明である。

また当遺跡は、霞ゲ浦から立ち上がった最初の台地であり、逆の見方をすれば霞ゲ浦に突出する最先端部の台地でもある。今回このような調査結果が得られたことは、麻生町で北浦と霞ゲ浦に突出する最先端部の台地にも集落＝遺跡が所在することを示しており、今後注意しなければならない点である。

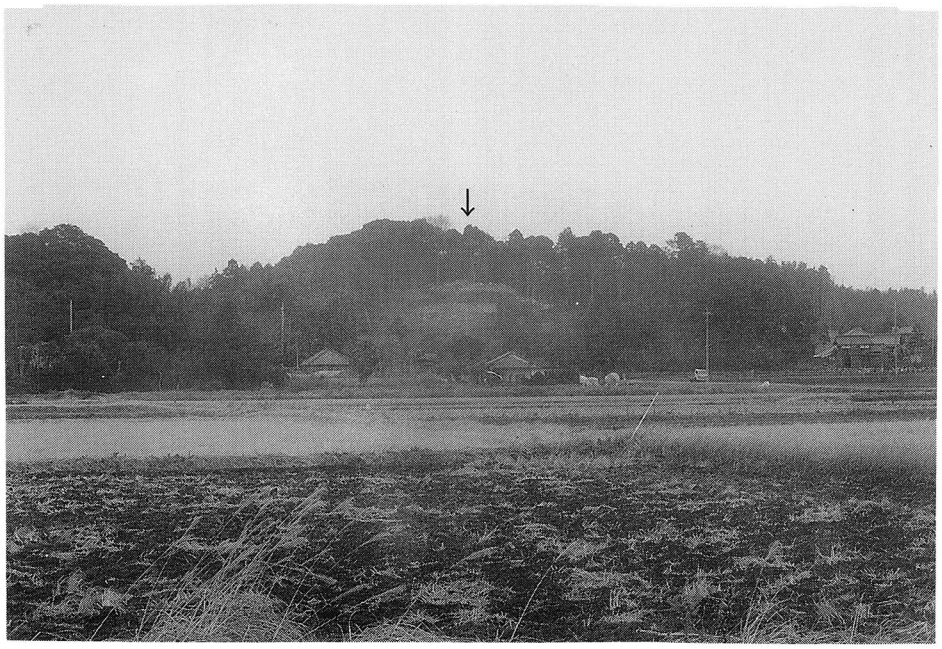
Ⅷ　報告書抄録

ふりがな	いばらきけんなめがたぐんあそうまち　じょうくちいせきちょうさほうこくしょ
書名	茨城県行方郡麻生町城口遺跡調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	藤原　均
編集機関	常総考古学研究所
所在地	千葉県佐倉市山崎 170-8
発行年月日	平成 13 年 5 月

収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
城口遺跡	茨城県行方郡麻生町 於下字城口	407	299	140° 27′ 40″	36° 2′ 13″	平成 13 年 1 月 30 日 より 2 月 13 日	500 ㎡	土砂取工に 選考す調査

収録遺跡	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城口遺跡	集落跡	古墳奈良時代 中世 近世	住居跡　2 軒 溝　3 状 塚　1 基	須恵器高台付坏・土師器甕・壺・椀等 十文字轡 土師器片	なし

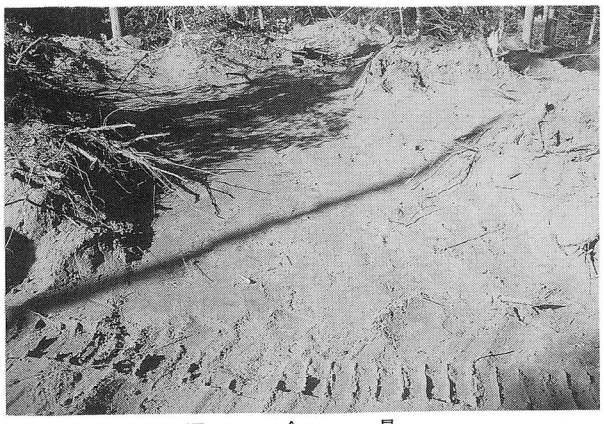
写真図版Ⅰ　遺跡遠景・全景



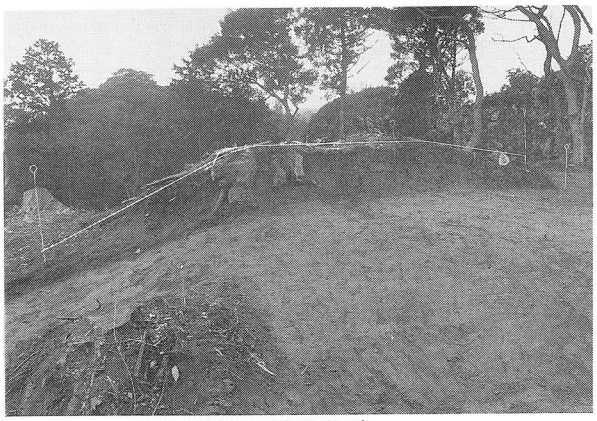
遺　跡　遠　景

遺　構　全　景

写真図版２　遺　　構

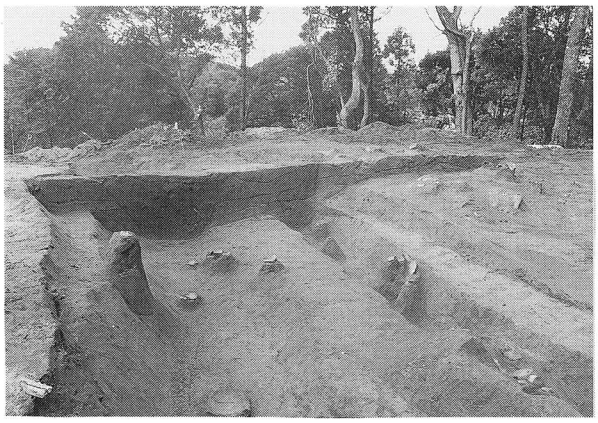


1、塚　　全　　景

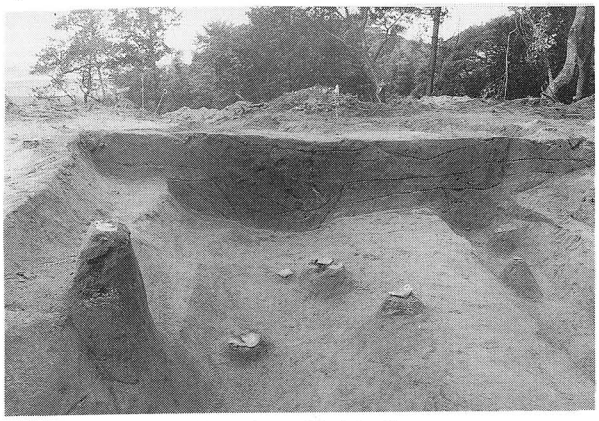


2、塚土層（南北東面）

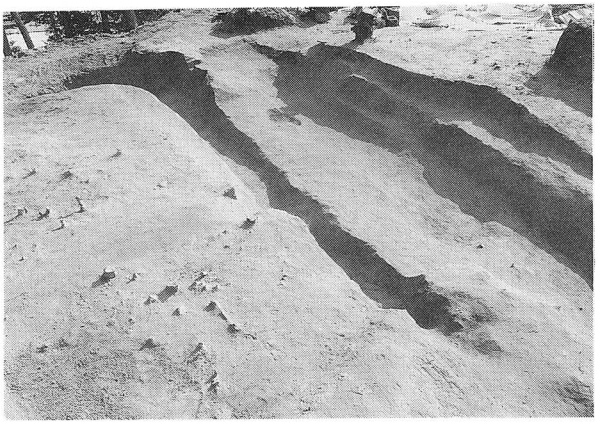
3、住　居　跡　全　景



4、溝・住居跡土層（東面）



5、溝　土　層（東面）



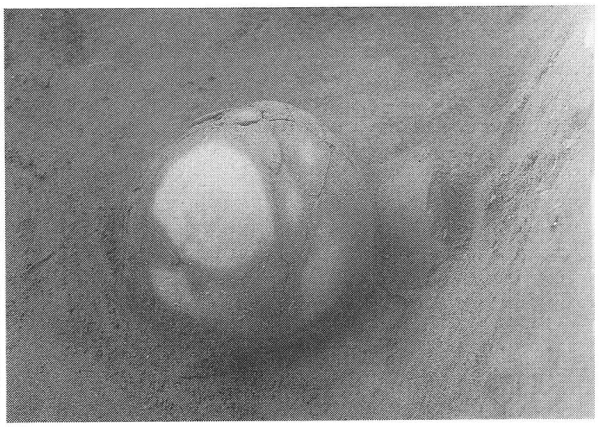
6、溝　東　側　全　景

7、溝　西　側　全　景

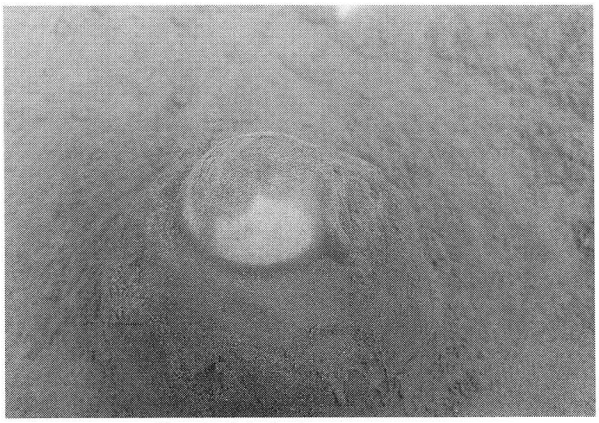
8、調査区域外北側古墳全景

写真図版３　出土遺物

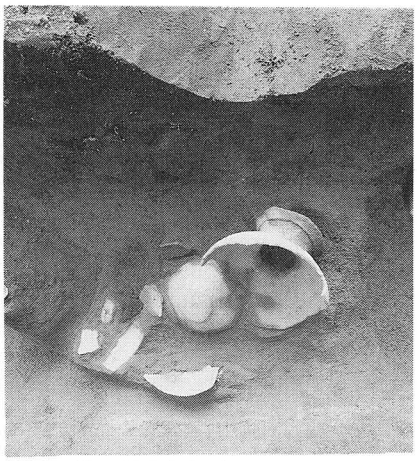
１、 第１・２号溝内遺物出土状況



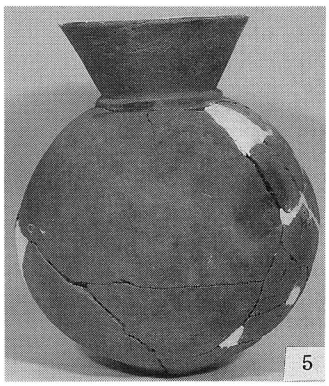
３、 第２号溝内甕（Ｎｏ５）出土状況



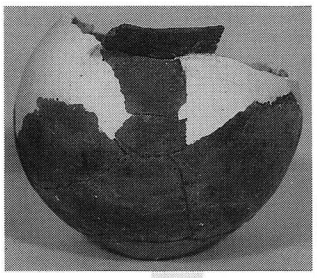
２、 第１号溝内壺（Ｎｏ３）出土状況



４、 第２号溝内甕（Ｎｏ４）出土状況

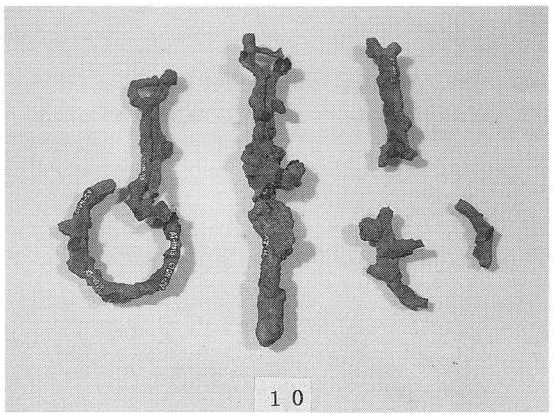


5

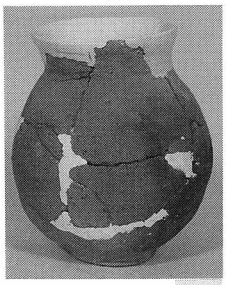


6

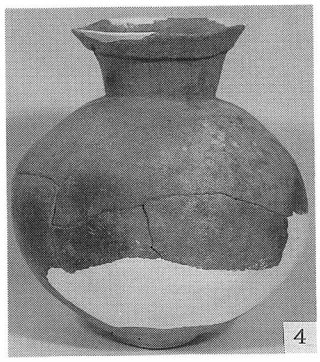
出　土　遺　物



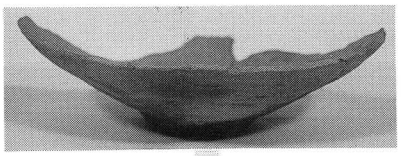
１０



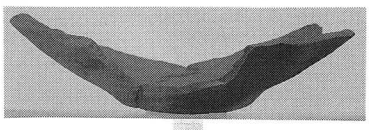
3



4

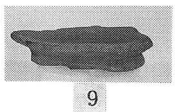


7



8

2



9

茨城県行方郡麻生町
城口遺跡調査報告書

発行年月日　平成13年5月
編　　集　常総考古学研究所
発　　行　麻生町教育委員会
印　　刷　㈲寺門印刷